

大岡越前守金言の事

越前守忠相の享保の頃出方しては種々より大目上  
 あり政情の一人也大目出きさる。懐心院旅の法小姓  
 を勤め思ふよけいある果をあらはれよけいほ  
 二万石とほか増しては保は用入と成岩附の城をあり  
 一うほちの法保の法同姓の好方有越前守おしり雲  
 取の館へ入り坊々をさ或時越前守へ對しはひ方を  
 南州世とよして天下の大目と稱しは用いし一むあ  
 ち我も小目よりは元々よ新りは政事をも禁りらる  
 新々ハハはほとも可成ゆめハ不情な縁あり多くと怒  
 ころまハ越前守素縁ありして何ん存意一事とぞ之出方  
 して幸よありて尚時 將軍おの思ふよけいを  
 体り残りあるはし何んお家の公海あ〜ん志う一志  
 の某あるハ解法方のいほたあらん幸中きぬもふ美  
 あり新々中讀早て人よ對しても世の事よ新々一  
 そ美場を今きてのい斗ある〜志う一実を以て合  
 き新々ハ肝要のいほ〜と中され〜とま〜ゆ〜信仕  
 きて御勤也〜大目ある〜といふもほ法たつと政め  
 柿堂よ勤仕ありたる〜とけい〜と平支配あり  
 ありたつより〜は〜志〜ぬ







丁の家之（尸付）其方大工道具成押く  
不意故不日計家藏と為地以と尸其内のもの  
料物一月之分積り之不念大工方にてせと尸  
後これ遠宵如く遂に之不目と出さるまこと  
後新所家主方相成さる玉弁也

史料D 木綿盗人

木綿盗人吟味の事

徐川辺寺所石地蔵の前より木綿賣の荷物卸して  
何中用事たして寺敷内より荷物とくく棄て  
きり木綿賣大にり路紀是にせしきり其れ共不  
行未不知依之不及是非なり一泊し吟味難なり  
其多賊はねくて木綿の物とく不致ふ其後わら  
ゆりり其地蔵しき令く盗人形跡をり一處をりめ  
て是れ縄成魚とくきり地蔵盗人こゝ家つてこの  
水仕を添り干時染の木綿盗人令い安堵し  
盗人し木綿成賣出しきりねん前のも縁し  
ふとて元是なりい所中へ小解り此ねとく入  
木綿買元しとの早速もり三柄糸仕ぬとみり  
形し一故にこみ柄出りぬ盗賊主と相しきり  
水仕をりぬとて教し多教り念の事り  
織と世譽しりあゆ

江戸四ツ谷大木下邊よりまゆ二人住の者あり  
 まい大坂五番の竹藪元庵に一年余り女房計  
 多かりしをいしき番希しく翌三年師の老死  
 まの爲り中より女房懐妊するに及ぶにまゆ  
 是て大死に墮るに女房を多く冷殺して正妻  
 密まゝ多かりしをいしき相手を何者も  
 誰ありしと極に冷殺して女房を責め共殺  
 其妻誰共之稱にま大に膠着して冷血淫殺に  
 中まゝありしをいしき中上考向と安くと之を  
 て欠出にありしをいしき中上考向に拙者五番の徳  
 記して去る四日夕大坂より女房を多かりし女房  
 懐胎何卒密男の冷殺を女房よりと中上考  
 ありしをいしき其爲り中上考向にありしをいしき  
 こゝ不意何と四死に及ぶに誰も其くとして  
 移せ不中女房を人斗猫一足何室中の中  
 此れ其猫を多かりし男男女女之冷殺に猫を  
 引猫に縄を懸く運ぶれと之を月々二人  
 是いとあやしき所ありしけれに秘に成  
 川身より多かりし猫に藤之へ居る所内乃  
 若死者と計りしをいしき出して白例に  
 をりて猫を多かりしをいしき猫は多くと走り  
 若者の由りて一人の藤の上の所ありて  
 居りし時より多かりし其猫の藤へ上りし男  
 縄で掛りて多かりし男と手とりし男



Handwritten Chinese text in cursive script, arranged in 15 vertical columns from right to left. The characters are highly stylized and fluid, typical of the 'caoshu' style.

Handwritten Chinese text in cursive script, arranged in 15 vertical columns from right to left. The characters are highly stylized and fluid, typical of the 'caoshu' style.



Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 15 lines of dense, cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 15 lines of dense, cursive writing.





の事なりし事ゆが佳く人月正挿入公編入  
出く印は正作ありし事人々知れ所之なる  
ま極る程なりし程を分ち仕置る所極る  
たまたま在る人の事と考へたりありし事  
た不可知なる親類之故十歳を我より擲  
けりし我の義ありし列に置たりて天誦極る  
たれども邪書と察しす故二百箇の合あり  
此方の合甚上行き合ふゆとんぬれと盗たれ  
たの事と和科と行りて極る事故あり  
事ゆゑ教らる事と天誦とんぬれ此方ゆゑ此の事  
佳なりし事と此の事とんぬれと天誦の事  
似たりし事と虚語ありし事

主殺直助様多事

享保の始大器忠相有以の節直助様多事と云主殺一が  
 少く此直助は保川万年所大器有云と云醫隊の卜人  
 少く少く此送師元淺野内進有長雄の家長小山田源右  
 衛門と云者の一子小山田元盛と云一者之一々元祿十四  
 年内進有及殿中よりて粮薪料<sup>料</sup>より仍く田村家よりて  
 切腹其家以従せり其折り大石良雄以始先四十  
 余へ讐言致吉良羽林と討てて時より保右衛門の病氣  
 一して勝不立憐れた事としり一々其徒業少く彼  
 随方志忠と是也く内進之由、陸頭志少く之縁十四  
 日〜其翌三年十二月十五日の夜致討の前日此直助は  
 俄り心考り三〜内進之由方々諸士の宿賢并異動しホ  
 有之彼てい天後の批判和〜と〜金子不有以直助  
 一〜と満拂成て知〜くお分かれ其今之成持〜出〜  
 妻々不帰とこ又一勝成其目大石より其い〜是は肥前  
 忠行の刀〜内進以の差也〜と〜と〜直助は  
 親い言傳の茶を伊勢屋十多事と中者い染々筆りれは  
 是一撤〜く〜直助は〜十二月十五日夜上野御成儀討  
 の事成源迄事〜定て憐直助も出多致辱〜一石  
 討死いせ忽り一子〜して上野御成儀討死〜一也  
 杯と業〜直助は〜一〜直助は不事〜三〜遊子  
 一由定て和が委後及老老人の人目包前〜腹切〜  
 死〜一〜直助は〜一〜不事存故其親と云故〜  
 其罪何〜一〜謝死直助は〜一〜直助は〜一〜

其罪同一かるに一ゆひ越て教也一夫不孝主乃所  
大事と忘れ述る月よひ何れの天地へ向てかゝる  
至る方なりや命に托し我物に経醫陣に如く保川  
百年所より我を去り其下人並物とし教者之く入  
念子成れく其くと其の教を志のくたん其に  
かゝ教に之く人る意目成是し一起上りて其の可成  
例より有肥前忠水の刀にて唯一折り切致し其妻  
驚く起無と是と又切教し一念子成れぬ主退氏より  
此並物まふ人相書といふ品者より形教されぬ其後  
身以考く下人の為り害せぬ天罰の報り也思し  
此れ此以後並物に何れこのかゝる其のあ教其相と之  
或ハ髪成蒸し一茶葉と其杯去りて鞠所を丁目の経  
四帝之儀より一茶蓋成去りて其多教時百海に白倒  
出言拙者若く並物なりといふく彼と中候より此時大書及  
並物より其く主とく主とく主とく主とく主とく主とく  
其教れり其の易し便大因大書より並物待し中これ  
ゆれいそのと之く下り其教未絶以愈よ曲者も其  
より其谷とゆれ不思其りし近昔より中々天余道  
其れより其の其く其の其く其の其く其の其く其の  
くのいふ者流より白状より其の其く其の其く其の  
中者是其其主成教也一其の其く其の其く其の其く  
日本橋より二日きり一礫より其の其く其の其く其の